第２回　第２期横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会　分科会	
日　　時	平成22年月12月２日（木）　10時から11時30分まで
開催場所	松村ビル別館　2階　201会議室
出席者 （敬称略）	井上禮子、黒津貴聖、斉藤保、柴田眞紀、白岩正明、竹谷康生、中野しずよ、名和田是彦、 平賀裕、山田美智子、吉弘初枝
欠席者 （敬称略）	なし
開催形態	公開（傍聴者1人）
議　　題	報告　事例収集の実施結果について（ヒアリング実施結果等） 議事　（1）ヒント集のまとめ方（案）について （2）人材の発掘・育成のためのヒント（中間案）について ア　人材の発掘について イ　人材の育成について
決定事項	1　幅広い人材を発掘・育成するためのヒント（中間案）【資料4】について、今回の議論で出た意見をもとに事務局で修正し、再度委員に内容を確認してもらうことになりました。
議　　事	**1　開　会　深川福祉保健課長** **健康福祉局福祉保健課長あいさつ** **2　報　告** **事例収集の実施結果について（ヒアリング実施結果等）【資料1、資料2、資料2－別添1参照】** **※　事務局より資料説明** **3　議　事** **(1) ヒント集のまとめ方（案）について【資料3参照】** **※事務局より資料説明** 【質疑】 （黒津委員）資料3の2　幅広い人材を発掘・育成する視点からのキーワードの抽出　の中で、②育成の「運営」というところについては、地域活動においては「運営」だけではなく「企画」も重要になると思うので、その点も留意してもらいたい。 （名和田会長）ヒント集を作成するための予算はどうなっているのか。 （事務局）来年度の予算執行を想定している。印刷部数には限りがあり、加えてデータを発信し、各々で印刷して活用してもらうことも想定している。 （名和田会長）「地域福祉活動」は垣根が低く、地域活動一般を示すことが多いので、そういった意味で広くいろいろなところに配布してほしい。第3回目の分科会では、ヒント集の活用についても議論するべきだと思う。

議 事

(2) 人材の発掘・育成のためのヒント（中間案）について【資料4参照】

ア 人材の発掘について

※事務局より資料説明

【質疑】

（黒津委員）地域福祉活動については、2点問題があると思う。1つは「人材」をどう集めて育てるか、ということと、もう1つは活動の「拠点」である。現状の資料では「拠点」についての表現が見られない。港南区の「さわやか港南」では、利用者から借りた一軒屋を使って活動が活発に行われている。町内会館やケアプラザ等、地域には様々な資源がある。そこから活動が始まることもあり、「拠点」のことについて触れてもよいのではないか。

（斉藤委員）すぐに拠点をつくるというのはなかなか難しいことである。地区センターやケアプラザ、コミュニティハウス等、いろいろな拠点があるが、むしろそういった拠点よりも、そこにこの人がいるから人々が集まる、という視点が重要なのではないか。

（名和田会長）拠点について「人材の育成」という観点から見ることはできないだろうか。拠点にいる人がコーディネート機能を発揮させることが重要である。拠点を活かして人材を育成するという視点が持てないか。泉区では12地区に拠点をつくろうという動きがあり、拠点整備の需要は高まっている。「拠点にどのような人がいれば活動は推進されるのか」という視点を持てないだろうか。

（吉弘委員）人材の発掘と育成、どちらにも関わる部分だと思うが、活動がうまく続いているところは、「一緒に活動したい」と思えるようなキーマンが必ずといっていいほどいるものである。そのキーマンが活動のきっかけづくりや活動中のアイデア出し、コーディネートをしている。

（井上委員）拠点も活動団体によってはあまり意味を持たないこともある。私の団体では自治会館は定例会以外には使っていない。拠点があって人が来るのではなく、活動の内容を知って来てくれることのほうが多い。

（名和田会長）活動団体のスタイルが出来てしまえばそういったこともあるかもしれないが、そもそも何も活動をしていない人は最初にどこに行けばよいのかという話になると、やはり拠点が必要である。団体のスタイルによっても需要はさまざまで、その点は留意する必要がある。

（竹谷委員）「人が集まる場所」がないと家を出て来られない人々がいるのは事実。どこかで何かをやっていると人が集まってくるという意味では、やはり必要なようにも思う。

（黒津委員）利用者の人々が、相互に意見交換したり、いろいろな相談をしたりする場所がまず必要であろう。自治会館もあまり活用がされていないのが実態である。地域の人々が集まることのできる場所が必要である。

（山田委員）現在、子育て支援拠点を運営している。自分の子どもは今小学生だが、子どもが乳児の頃はケアプラザの部屋を借りて町歩きのマップ等をつくっていた。当時は子育てカフェ等のイベントを利用して次のスタッフを探すなど、担い手を発掘するのに苦労していた。今は常時拠点に人がいることで、母親達からの活動のアイデアや希望が集まってくる。人と何かを一緒にやる、時間と場を共有することは重要だと思う。

	（事務局）次年度は「集う場」についての検討もしていく予定である。いろいろとご意見をいただいたが、「拠点があることによって活動が広がる」というところと、「活動によっては必ずしも拠点を必要とする訳ではない」というところがあった。様々な種類の活動があり、団体によってニーズは様々だということではないだろうか。 （名和田会長）拠点は大きなテーマである。他に「拠点での人材発掘・育成」という観点での意見はあるか。 （柴田委員）ケアプラザのコーディネーターをしているが、活動者の中にはいろいろな場所を転々としていて、定期的な場所がほしいという声も多い。ケアプラザをもっと広い用途で使ってほしいと感じている。 （名和田会長）また後日、委員の皆様からメーリングリスト等でご意見をいただきたい。 （中野委員）「仲間づくり」という点では、PTAが非常に有効だと思う。PTAは、共通課題がある中で話し合うことで、良い友人関係ができるのだと思う。PTAに参加している親をヘッドハンティングすることもしばしばあった。あくまで「福祉活動」という視点ではなく、カルチャーセンターやPTAなど、日常的な活動から誘い込むことが有効だと思う。 （名和田会長）確かに、PTAはいろいろな活動につながるルートとして機能していると思う。 （竹谷委員）１人引き込むと、良い意味でずるずるとつながってくるのがPTA派閥である。PTAは自分の子どもに直結する活動なので、義務感も強く、その中でのつながりは強固である。民生委員も、もとはPTAやこども会に所属していた人が多い。 （井上委員）確かにそう思う。 （竹谷委員）活動について、小学校の校長先生に相談に行くことも有効である。 （山田委員）私が現在所属する法人も、PTAでつながってきた部分が大いにある。しかし、市内でもPTAごとに温度差がある。私の子どもが通学している小学校ではなかなかPTAのなり手がなく苦労している。母親も皆仕事を持っている等、声をかけづらい実情がある。一緒にPTAに参加することで関係が深くなり、子育て支援をやりたいと言ってくれる人もいるが、そう多くはない。 （竹谷委員）仕事をしているということで拒否されることは多い。根本的にその年代の人が少なく、母数が不足している。私の団体では主に男性を引き込むターゲットとしているが、忙しい親を地域に引き込むには、最初から全て参加してくれ、というのは無理がある。私たちは「スター誕生方式」と言って、まずは例えばもちつき大会のもちつきだけだとか、子どもにとって親が格好良く見える場面だけをまずお願いする、という方法がある。子どもが喜ぶのであれば、と参加してくれる親は多い。 　更に、私たちの団体では「スキル」と「マネジメント」を分けて考えている。「活動に参加してください」というと嫌がられるが、「あなたが持っている技術について教えてください」というときてくれたりする。定年まで企業で働いてきた男性は人間関係に疲れている。むしろ最初はその人が培ってきた技術に焦点を当てると上手くいくことが多い。参加がしやすくなる「きっかけづくり」が必要。きっかけづくりについては、大いに留意すべきと思う。 　「問題意識」を高めるということについては、自ら問題を探して、それを周囲に発信するぐらいの強い姿勢が必要なように思う。

	（名和田会長）いろいろとご意見をいただいた。大きく分けると、 ・ PTAは人材の発掘に大きく関わる ・ 「スキル」と「マネジメント」の区別も、人材の発掘においては重要 ・ 問題意識を高める といったところだろうか。 若い人々が参加しやすくなるきっかけについては、何か案はないだろうか。 （吉弘委員）日中家庭にいる人々は横につながりやすいが、会社人間は地域のことはあまり関わる機会がなく分かっていないことが多い。参加しやすくするには、具体的にどんな活動をしているか情報発信することが重要ではないだろうか。チラシやリーフレットを使って情報発信する工夫についてもヒントに加えてもらいたい。 （名和田会長）チラシの中身の工夫については、発掘にはもちろん育成にも関わってくる部分ではないだろうか。 資料4の項目「情報発信」のところの、「地域住民の4割の認知度を目指す」というのはおもしろい発想である。地域福祉保健計画を含め、類似する計画や事業の認知度はほぼ1．5割程度である。認知度が4割程度まで上がれば、いろいろな意味で広がりが出るのではないだろうか。 **議 事** **(2) 人材の発掘・育成のためのヒント（中間案）について【資料4参照】** **イ 人材の育成について** **※事務局より資料説明** 【質疑】 （名和田会長）こちらについても、自由にご意見をいただきたい。人材の育成ももちろんだが、団体そのものの育成という意味合いも含まれていると思う。 （中野委員）項目「やりがい」については、自分の活動の中でも、普段からスタッフを褒めるなど、意識するようにしているが、それだけではなく、形に残すと効果が大きいと思う。例えば、タウン誌等に活動の記事が載ると、参加者のモチベーションが上がる。その他にも、スタッフの勤続5年、10年、20年等の節目の年には表彰を行っている。表彰状には1人1人違う賞賛の言葉を記入するようにしている。普段からその人を見ていないとできないことである。 （竹谷委員）先日の朝日新聞に、中野委員の団体に所属する方と活動に関する記事が載っていましたね。 （黒津委員）ボランティア活動のアンケート調査等の内容を見ると、男性の意見が吸い上げられていないように感じる。中央図書館では、男性が40人ぐらい集まって本を読み、意見交換をする活動が実施されていて、非常に活発である。男性は目標を与えられるとそれに向かってやっていく。是非そういった男性の活動がうまくいっていることについても触れてほしい。 （井上委員）私の団体は、「マザークラブ」と名乗ってはいるが、ボランティアで毎日来てくれている男性もいる。車椅子の疑似体験の活動を、学校や消防署で行っている。男性が増えてきて

おり、みな非常にいきいきと活動している。

（名和田会長）神戸に震災の関係で防災の博物館があって、そこの通訳ボランティアはほぼ男性である。男性がやりたがるボランティアの種類があるのではないか。

（竹谷委員）パソコンのボランティアは男性が多い。

（名和田会長）定年退職した男性が自己肯定感を味わえるような種類のボランティアがあるのではないだろうか。

（竹谷委員）パソコンのボランティアについては、教える側も教えられる側も達成感が感じられる。年賀状の印刷等、1～2ヶ月あればある程度上達するので、そういった速度感がよいのではないだろうか。項目「やりがい」については、活動を漠然と続けていると長続きしないのではないか、と思う。しかも、真面目に活動をしている人に負担がかかりがちである。私の団体では地域通貨のようなものを発行していて、ボランティアに参加した人の所属する団体に発行することにしている。個人ではなく、団体に発行することで、良い意味での競争意識が芽生える。真面目な人も、あまり参加ができない人も評価される場を設けるよう努めている。褒めることも叱ることも、あくまで全体で行うようにしている。もちろん、当人が恥をかかないよう留意しなければならないが。

情報発信については、定期的に広報を発行している。あくまで定期的に発行することに大きな効果があると思う。

（山田委員）ブログやホームページの更新等、頻繁に見せていくことが大事である。定年退職した男性が、地域でのネットワークをつくりたいと言って、インターネット上で地域の各自治会の活動紹介をしてくれた。拠点にボランティア希望で来る学生に、何でここのことを知ったか、と尋ねると大抵はインターネットである。紙ベースの広報と、インターネットを並行して定期的に使っていく必要がある。

（斉藤委員）自分たちがやっていることを地域に公開することが重要。情報「発信」だけではなく、情報「共有」という考え方で取り組まなければならないと思う。発信だけでは、自己満足になってしまう。

（名和田会長）チラシの作り方についても、勉強する必要があるかもしれない。

（斉藤委員）活動に引き込むときの誘い文句には何かしらのキーワードがあると思う。「あなたのその能力がこの活動には必要」といった具合に。

（名和田会長）誘い文句を直接具体的に提示してもいいかもしれない。

（白岩委員）旭区でも地域福祉保健計画策定を進めていて、地域の良いところや課題等を話し合う懇談会を数回やってきている。その中で感じるのは、やはり地域のニーズを最初にしっかり捉えていないと進めていく段階で焦点がぼやけてしまうということだ。拠点づくりも確かに重要である。拠点を運営する中で、スタッフ同士のつながりも強まってくる。実は子どものことで困っている等、違うニーズも出てきたりする。しかし、場所をつくるにはお金がかかる。費用の捻出、ランニングコストをどうするか、という問題がある。助成金や会費で賄うという方法もあるが、私たちの活動では、NPO法人を立ち上げ事業を起こし、捻出することにした。

情報発信については、チラシはこういうふうに作成すると良い、というような例をヒント集に盛り込めたら良いと思う。

	（名和田会長）地区別計画や、活動拠点の中にもヒントがあると思う。実施したヒアリングの内容を、今まで出たような意見の視点で拾い直す必要があるのではないだろうか。また、費用の捻出という意味では、活動の有償化の話についても、どこかで触れる必要があるかもしれない。 （平賀委員）Y150のボランティアスタッフから人を集め、団体の立ち上げから1年ほど経ち、54名ほどが在籍しているが、どういうことをやりたいかと聞くと、意見がなかなか出てこない。例えば、特別養護老人ホーム等の施設でボランティアがあり、「いずれ自分たちもお世話になるところだから、今から様子を見てみないか」という誘い方をすると、1年で88人が手伝ってくれる人が見付かった。誘い方ひとつだと思う。そのような活動をするかという話し合いではなかなかアイデアが出ないが、やることが決まればついてくるものである。決まるまでが時間がかかるので、ある程度カテゴリーをこちらで決める等の工夫も必要かもしれない。 （名和田会長）集団が話し合う気風をつくることも大事である。 （竹谷委員）地域に対して想いがあることも重要である。私たちの団体は、「地域のブランドを高めよう」というフレーズで活動が活発になってきた。 （斉藤委員）集まった人に対して、責任や役割を与えることはとても重要である。資料4の中で、新たな項目として立ててもよいかもしれない。また、人材の発掘には、学びの場は重要だと思う。活動には自分自身の学びや自己啓発の意味もある。一般的な講座等ではなく、スタッフ自身がわからないことや、困っていることについて勉強する機会があるということも活動が発展する要素の1つであり、もう少しクローズアップしてもよいのではないか。 （名和田会長）地域活動は「気軽にやりましょう」というトーンになりがちだが、役割を与えられることでモチベーションが上がるということも大いにあると思う。言葉は選ぶ必要があるが、「責任」は重要な要素の1つである。そこに自分がいる意味、意義を見出すことができ、やりがいや人材の育成につながる。 議論を通して、いろいろとポイントが出てきたと思う。 ・人材発掘・育成という視点からみた拠点 ・PTAの活用 ・男性が参加しやすい仕掛け ・若い人が参加しやすい仕掛け ・情報共有の工夫 ・具体的なシチュエーションでの具体的な誘い文句 ・責任、役割 といったところだろうか。いくつか論点を事務局で整理して、再度委員に投げかけてもらえないだろうか。 （黒津委員）あと1点、活動をするにあたっては中心となりさまざまな動きをするコーディネーターが必要だと思う。「コーディネート機能」についても、付け加えていただきたい。

	（事務局）事務局で本日の議論を整理し、資料4について追加・修正していく。メーリングリスト等を使って依頼させてもらうので、また内容についてご意見等お願いしたい。
資　　料 ・ 特記事項	（資料1）ヒアリング先一覧表 （資料2）ヒアリング項目ごとの共通点（案） （資料2－別添1）【参考】ヒアリング項目ごとの回答集（ヒアリング結果から） （資料3）分科会　ヒント集のまとめ方（案） （資料4）幅広い人材を発掘・育成するためのヒント（中間案）